

# 人の命つなぐ生産基盤

## 京丹後で棚田フォーラム

「丹後・棚田フォーラム」が4日、京丹後市弥栄町の府丹後農業研究所で開かれた。過疎化と耕し手の高齢化で棚田の放棄が進む中、アジアの棚田の現地調査を続ける専門家や棚田を耕す農家らが参加。食料を生み出す生産基盤としての棚田の強さを見つめ直すとともに、生きる知恵の宝庫である棚田を山や畑など暮らし全体からとらえることが大切などと多様な意見が出た。

【塩田敏夫】

丹後地方でも大規模化がでずに手間が大変な棚田の放棄が深刻化。鳥獣害被害の拡大とともに、放棄された棚田は山崩れを引き起こし住民の安全を脅かす事態になっており、府丹後広域振興局が解決の糸口を見つけようと初めて開いた。

まず、バンングラデシユや広大の棚田がある中国雲南省などアジアの農業の現場を調査している京都大東南アジア研究所准教授の安藤和雄さんが「アジアの中山間地農業から棚田農業と日本の保全活動を考える」をテーマに講演した。

安藤さんは、日本の農村の美しさは「人の汗、時間の経過が埋め込まれた空間」との歴史学者、古島敏雄さんの言葉を紹介。「日本の人はもっと水田の放棄について真剣に考える必要がある。いくらきれいことを言ってもダメ。現状を放置してアジアに向かってものが言えるだろうか」と問題提起した。

さらに、棚田は人のいのちをつなぐ生産基盤だからこそ美しいと強調。「食料問題が戦争の原因となることをひしひしと感じる。自

前で食料を作ること、生活の中で田んぼを大切にすることを考えて



棚田の将来について意見を交わすパネリストたち  
—京丹後市の府丹後農業研究所で

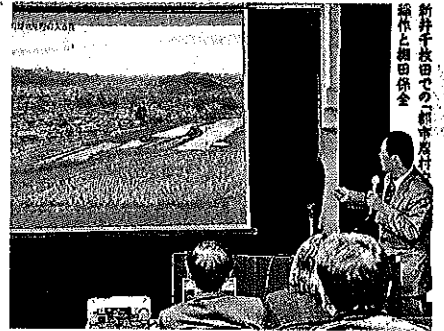
ほしい。棚田は技術的に難しいというが、本当にそうだろうか」と呼びかけた。これに対し、参加した農家から「山間部の棚田は昼夜の温度差が大きく、病気にも強い。おいしい米が取れる」と棚田の良さを見直す意見が出た。

府農業研究所の中村均司所長は袖志など3集落の棚田を調査した「丹後の棚田における『こなわ・かんだ』の役割」を語った。「こなわ・かんだ」は丹後地方の方言で、ほ場内の小水路。水温や水質を一定に保つよう工夫したもので、先人たちの知恵のかたまり。世界で水の問題がクローズアップされる中、棚田の水から学ぶべきことは多いと指摘した。

この後、宮津市の上世屋で棚田を復活している「合力の会」の井之本泰さんや「伊根と新井の千枚田を愛する会」の福満敏博さんらとともにパネルディスカッション。京都府立大助教の中村貴子さんをコーディネーターに「棚田のいまとこれからを考える」をテーマに意見を交わした。

# 棚田保全 課題探る

京丹後でフォーラム



各地の棚田を紹介する安藤教授（京丹後市弥栄町・府丹後農業研究所）

府主催の「丹後・棚田フォーラム」が4日、京丹後市弥栄町の府丹後農業研究所で開かれ、約70人が丹後地方の棚田の保全や復活の取り組みを聞き、今後の課題を考えた。講演した安藤和雄・

京都大東南アジア研究所教授はアジア各地と日本の棚田を比較し、中国の特徴的な構造について説明。日本の棚田に関しては「美しい景色のためだけでなく、生産基盤としても保全を考えなければな

らない」と強調した。宮津市上世屋で棚田の復活に取り組む「合力の会」の井之本泰さんは、オーナー制の導入など多彩な活動を報告。畑や山、民家など周囲の環境保護とともに棚田の保全を考える必要性を話した。

「伊根と新井の千枚田を愛する会」の福満敏博さんは都会に住む人々が保全に協力する活動を紹介し、「豊かな自然を伝えるシステム作りが地域活性化につながる」と語った。

（片村有宏）

# 魅力・保全策を論議

京丹後 「棚田フォーラム」

丹後地方の棚田の魅力と保全対策を話し合う「丹後・棚田フォーラム」が4日、京丹後市弥栄町の府丹後農業研究所で開かれた。約70人が詰めかけ、専門家の講演や棚田での稲作や都市との交流に取り組む人の報告を熱心に聴いた。

宮津市上世屋地区で棚田復活に取り組む「合力の会」の井之本泰代表は「急斜面の草刈りは大変だが、ほっとする美しい景色を眺めながらの作業はいいものだ」と魅力を紹介。府立大の中村貴子助教は棚田での農作業について「す

べて手作業で農業の知恵が詰まっている」と指摘した。千枚田での米作りに取り組む伊根町新井の福満敏博さんは「棚田応援団」を募集して稲作や農道整備をしていると報告。安藤和雄・京大東南アジア研究所准教授は「棚田は日本とアジアの原風景。日本の棚田復活に向け、棚田がある中国・雲南省の農民に働いてもらっては」と問題提起をした。



討論では棚田の魅力と保全活動を話し合った＝京丹後市弥栄町

2010年2月6日(土)

# 機能あらためて認識

② 3/6

## 日農 京都・丹後 フォーラム 保全の意義学ぶ

【京都】棚田の機能や 農業研究所で開かれた。役割を学ぶ「丹後・棚田 フォーラム」——棚田のい 保全、美しい景観提供な 束、これから」が4日、 京丹後市弥栄町の府丹後

て認識した。 棚田保全の意義・課題 を考え、保全活動につな げようと、府丹後広域振 興局と府丹後農業研究所 が初めて企画した。農家

や一般府民ら約80人が参 加した。

同振興局農林商工部の 丹下均部長が「機能が失 われている所もあるが、 保全の意義を知ってもら えば」と呼び掛けた。 京都大学東南アジア研 究所の安藤和雄准教授 が、アジアと日本の棚田

農業について講演。安藤 准教授は「バングラデシ ュの棚田は、人の手入れ がなく究極の自然風景。 一方、日本の棚田は、人 の汗・時間の経過が埋め 込まれた空間」と、農家 が自然と調和して農村を 守ってきた証しだとし た。